真昼の湯気

昼に行く銭湯が好きだ。酷暑の夏でも、昼がいい。開店前から並ぶお年寄りで脱衣場があふれる朝は、常連さんらの無言の圧に気後れするし、夕方は子連れのママが押し寄せて、洗い場が運動会のように賑やかになるのが、どうにも苦手で。もともと、母が好んでいた時間だった。幼い頃から、先客たちが一斉に帰るお昼時、ぽっかり訪れる静寂を狙ってぷらっと連れられて行くのが、好きだった。

駅から少し歩いたところにその小さな銭湯はある。色あせた暖簾をくぐり重いガラス戸を開けると、かすかに硫黄と石鹸の匂いがした。番台で入浴料を払い、人気のない脱衣所で服を脱いで畳む。浴室に入るともうもうとした湯気が漂い、視界を白く染める。古い換気扇がカタカタ回るいつもの光景。湯船はひとつ。かけ湯をしてから身体を沈める。湯は少しぬるめだった。

「ふぅ……」肩まで浸かると、緊張がほどけていく。毎月 1 日だけ取れる有休。ここに来るまで、無意識に奥歯を噛み締め、東京での日常の硬さを背負っていた自分に気づく。

しばらく一人で湯に浸かっていると扉が開いた。白髪の年配の女性がゆっくり浴室に入ってくる。かけ湯を済ませ、お湯を驚かせないようにゆっくりと湯船に身体を沈めた。

「いい温度ですね」

隣に腰を下ろし、女性は湯の表面を見つめたままつぶやいた。

「そうですね」

私が応じると小さくうなずいた。

その横顔を湯気越しに盗み見る。肌の色つやもいい。ご飯もちゃんと食べているのだろう。

視線に気づいた女性が不思議そうに見返してきた。私は慌てて言葉を取り繕う。

「ここ、よく来られるんですか」

「たまに、ですね。何か決めたいことがあるときとか」

「決められますか？」

「決めるというか……決めなくてもいいことが、わかるんです」

湯気の向こうで、くすっといたずらっぽく笑うのが伝わる。

「ここのお湯、ぬるいでしょ？ 熱いお湯だと考えごとが全部、湯気になって頭から出ちゃうの。ここはちょうどいいから、逃げないのよ」

その謎めいた言葉は、不思議と耳に残った。

「ちょうどいいと、何が残るんですか？」

「そうねぇ、一番たいせつなことかしら。お腹の底にほんのりね」

女性は指先で湯の表面をなぞり、小さな波紋が消えた。

「あなたは、何か決めたいこと、あるのかしら？」

私は湯気を見つめながら答える。

「あるような気もするし、ないような気もします」
女性はまた少しだけ目元を和ませた。
「それは、健やかってことね」
その笑い方は、私の記憶の中にいる、かつての母のままだった。
湯から上がるタイミングを見失って、私は指先で湯船の縁を軽く叩いた。コ、と小さな音が湯気に消える。
「そろそろ、のぼせちゃうわね」
女性が先に腰を上げた。白い足首から滴る水滴が床に落ちる音が響く。私はあえて少し湯に残る。(転ばないように、気を付けて、一歩ずつね……)
骨ばった背中に念じながら、彼女の言葉が、心のお腹の奥へとゆっくり落ちていく。
脱衣所に戻ると、女性は鏡の前で髪を整えていた。「どうも」と声をかけると鏡越しに視線が交差した。彼女は時折よろめきそうになりながら、肌触りの良さそうな肌色の下着を丁寧に身に着け、柔らかそうなパンツと花柄のTシャツを着ると、「お先にね」と丁寧な会釈を残して番台のほうへ歩いていく。

この前、施設に届けたそのTシャツ、似合って良かった……。
私も急ぎ着替えて後を追う。濃い湯気の中にいたせいか、外の世界では見慣れた景色の輪郭がいつもよりくっきり見えた。
銭湯の前で、いつものように施設ロゴの入った名札をぶら下げたスタッフの小竹さんが待っていた。彼女は私に気づくと、小さく会釈をくれた。
母は小竹さんに手をとられると、ふと足を止め、ゆっくり私のほうを振り返った。
「髪の毛、よく拭いてね。風邪ひいちゃうからね」
別れ際、毎回、この人はこれを言う。そして私は毎回、こみあげる。
先月もその前の月も会ったのに、物忘れの病が進む母の記憶からは、私の顔も、ここへ来る約束もすべて消え去っている。それでも。毎月、この一言だけは、母のお腹の奥底から漏れなく私にかけられる。そのたびに私はこらえられず、泣きそうになる。
娘ではない人に支えられながら、母はゆっくり歩いていった。
真昼の光の中で小さな背中が少し揺れる。娘の私はしばらく立ち尽くしていた。
ここに来る前、いつも私を重く埋め尽くす罪悪感。母親を施設に預け、都会で働き続ける一人娘の自分を責める気持ちが、今日はシュワッと蒸発する音が聞こえた気がした。そして、お腹の底のほうにほんのりと残った声は、「今は、これでだいじょうぶ」だった。ぬるめのお湯の中で残った思いがこれならば、今日はこれでいいのだ。きっと。

帰りのバスが近づいてくる。乗り込む瞬間に、もう一度だけ銭湯を振り返った。
お母さん。また来月、またお昼のこの時間に、このお湯に来ますね。